



バイエルン州立歌劇場《オテロ》から。カウフマン(上)とハルテロス(下)が出演とあって、チケットが争奪戦となった

## ペトレンコが「真のイタリアニタ」?

現代ドイツが理屈で答えを出した《オテロ》

ヴェルディ《オテロ》はテノール歌手にとって特別なオペラだ。英国ロイヤル・オペラ・ハウスでのデビューを成功させたヨナス・カウフマンが、故郷のミュンヘンで、バイエルン州立歌劇場の看板ベアと称されているアーニャ・ハルテロスと歌うのが聴ける。そして何より、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団に去ってしまう直前のキリル・ペトレンコ音楽総監督が今シーズン担当する初の新演出ということ、チケット争奪戦真つただ中の2回目公演を11月28日に観た。

ミュンヘンで独文学と演劇学を学んだアメリカ・ニールマイヤーの演出は、オテロを戦争のトラウマ犠牲者として描いた。男女同権が比較的浸透しているドイツで、シエイクスピアの時代のドラマに現実味を持たせるには、皆が納得のいく理由を必要としたのだろう。そのため現代にも通用する人間ドラマになったが、反対に、輝かしい英雄が畏に嵌って自滅するという本来のドラマティックさは皆無だった。

客電が落ちるとすぐに幕が開き、密かにスタンバイしていたペトレンコが冒頭から熱い指揮を見せるが、そのパワーに合唱もオーケストラも、十分ついて行かれてなかった。ペトレンコは完璧なまでに、精密に構築された美しい音楽を聴かせるのだが、そこにはヴェルディらしさはなく、まるでオテロのフランス語版が存在するような仕上がりだった。

ブラシド・ドミンゴの系統を継ぐ、バリトンの響きを持つテノールとして世界の頂点を極めているカウフマンは、



悪魔が乗り移っているかのよ  
うなイアーゴを演じたフィン  
リー(左)と戦争のトラウマ  
を抱えたオテロを演じたカウ  
フマン(右)



第一声の「Resonate」を無事クリアしたものの、ピッチが低い部分があつたと続いたのは、ベトレンコの統制された棒さばきが、イタリア的フレーズを歌わせてくれないため、自然に息が流れることなく詰まっているからだろうか。頭声も使い過ぎだが、それはカウフマン自身の傾向だ。

ハルテロスも 体当たりの演技を見せるが、カウフマンと同様に最後までヴェルディ・レガートに導かれず、声が花開くこともほとんどないまま幕が進み、**「アヴェ・マリア」と「オテロの死」**の各アリアでやっと解放されたようだった。

イアーゴのジェラルド・フィンリーは、悪魔が乗り移っているかのように好演した。その腹黒さには似合わない美声で軽やかに歌うことによって憎々しさを醸し出すのは、往年のイタリア・バリトンにはなかなかできない技だ。しかしイアーゴとしては声量が足らず、有名な「Bovi」(飲め)と繰り返す下降フレーズなど、滑らか過ぎてスリルがない。アリアではまさに悪魔のような顔で歌うも、最後の盛り上がりには欠けた。オテロとイアーゴの輝かしい二重唱も頂点に達さないうちに終わってしまった。

その他のキャストでは、カッシオの

エヴァン・リロイ・ジョンソンが重要な脇役を演じ、モンターノのミラン・シルジャンノフも警沢な配役だった。

隅々まで大切に作られており、好感を抱いたが、問題なのは、批評家たちが「真のイタリアニタ」と評している点だ。ベトレンコの指揮は細部まで計算し尽くされ、満足感に満たされるが、これがイタリアニタだという概念がまかり通ると、イタリア・オペラの真の伝統が消えていくのではないか。

取材・文 中東生  
Photo = Wilfried Hosi



フィンリー(手前)のイアーゴは腹黒さが際立った



その真価が出せず  
じまいったカウ  
フマン(右)とハル  
テロス